

今日の焦点

米国におけるブロードバンドサービスの普及状況

わが国ではNTTが中心となって、通信回線の広帯域化、光化が進んでいるが、米国におけるブロードバンドサービスの普及状況はどうなっているのだろうか。

米国 FCC（連邦通信委員会）は本年6月12日に「米国におけるブロードバンドサービスの普及の進展」と題した議会あての報告書を公表した。米国議会は、1996年の電気通信法の改正に際して、「FCCは米国民が高度な電気通信機能をどの程度利用できるかを定期的に調査し、その普及を阻害している要因を洗い出して、それを除去するための措置をとること」を義務づけており、今回の報告書はこれに基づいて提出されたもので、今回は5回目に当たる。この報告書によれば、少なくとも一方方向で200Kbpsを越えるものを「高速回線」、このうち双方向とも200Kbpsを越えるものを「高度回線」と定義し、2007年6月末現在のデータを使用している。

高速回線については、速度別に以下の通りである。

- ・ 200Kbps～2.5Mbps未満＝2,790万回線
 - ・ 2.5Mbps～10Mbps未満＝3,770万回線
 - ・ 10Mbps～25Mbps未満＝380万回線
 - ・ 25Mbps～100Mbps未満＝9.2万回線
 - ・ 100Mbps以上＝2.1万回線
- また高度回線については、6,960万回

線となっており、2003年12月には1,990万回線であったから、4年間で3倍以上となっている。また、このうち住宅用は6,110万回線であるとしている。回線種別の比率は以下の通りである。

ケーブル＝48.8%、ADSL＝33.6%、SDSL＝1.5%、エンドユーザー構内まで光ファイバー＝2%、その他＝14.1%

わが国におけるブロードバンド回線は2007年6月時点で2,720万回線となっているが、その多くは10Mbps以上であり、そのうち光回線は970万回線であるから、高速化という点では圧倒的にわが国が優位に立っている。

また、高度回線の回線種別の比率は、米国ではCATVが普及しているため、ケーブルの比率が非常に高い。わが国の2007年6月時点の比率は、ケーブルが13.6%、DSLが50.7%、FTTHが35.7%となっており、相当異なった構成比になっている。

米国では、全世帯の約6割がCATVを利用しているが、CATV会社は地域独占であり、料金を引き上げる傾向が強く、また回線の速度も数Mbps程度に留まっている。ベライゾン、AT&Tは、こうしたCATV会社に対抗して光を経由してテレビを視聴するサービスを始めている。ベライゾンはテレビを光に接続する基本的なプランが月額47.99ドルで、常時200以上の番組が配信しており、2005年秋からサービスを開始し、2007年12月には利用世帯が94万件となった。AT&Tも月額44ドルで50番組を配信するサービス

などを2006年から提供しており、2007年12月には23万件となった。今後通信事業者とCATV事業者の競争はいよいよ激化すると見られるが、米国における光の普及は通信事業者のこのサービスがどこまで拡大するかにかかっている。

さて、FCCは今回の調査結果について、「事業者は広帯域のために積極的に投資し、さらに広帯域を使った新サービスやアプリケーションが出現しており、広帯域への加入者も着実に増加していることから、高度電気通信機能の米国民へ普及は、妥当でタイムリーに進行しつつある」と結論づけている。しかし、FCCの民主党系委員のひとり、「そもそも、アジアや欧州諸国では50Mbpsや100Mbpsがどんどん利用されているのに、200Kbpsまでブロードバンド回線と定義しているのは、時代錯誤も甚だしい」と厳しく指摘しており、今回の報告についても、「ブロードバンドは21世紀の経済活動や雇用等、国の発展の基礎となる重要なインフラであり、米国の立ち遅れを湖塗し、ブロードバンドサービスは妥当でタイムリーに普及しつつあるなどと従前の文言を繰り返しているのは論外である」と痛烈に批判している。

かつて、米国に追いつき追い越せと努力してきたわが国は、FTTHによるブロードバンド化において、確かに米国をはるかに抜いているが、果たしてこれで、米国を追い越したなどと言えるのであろうか。